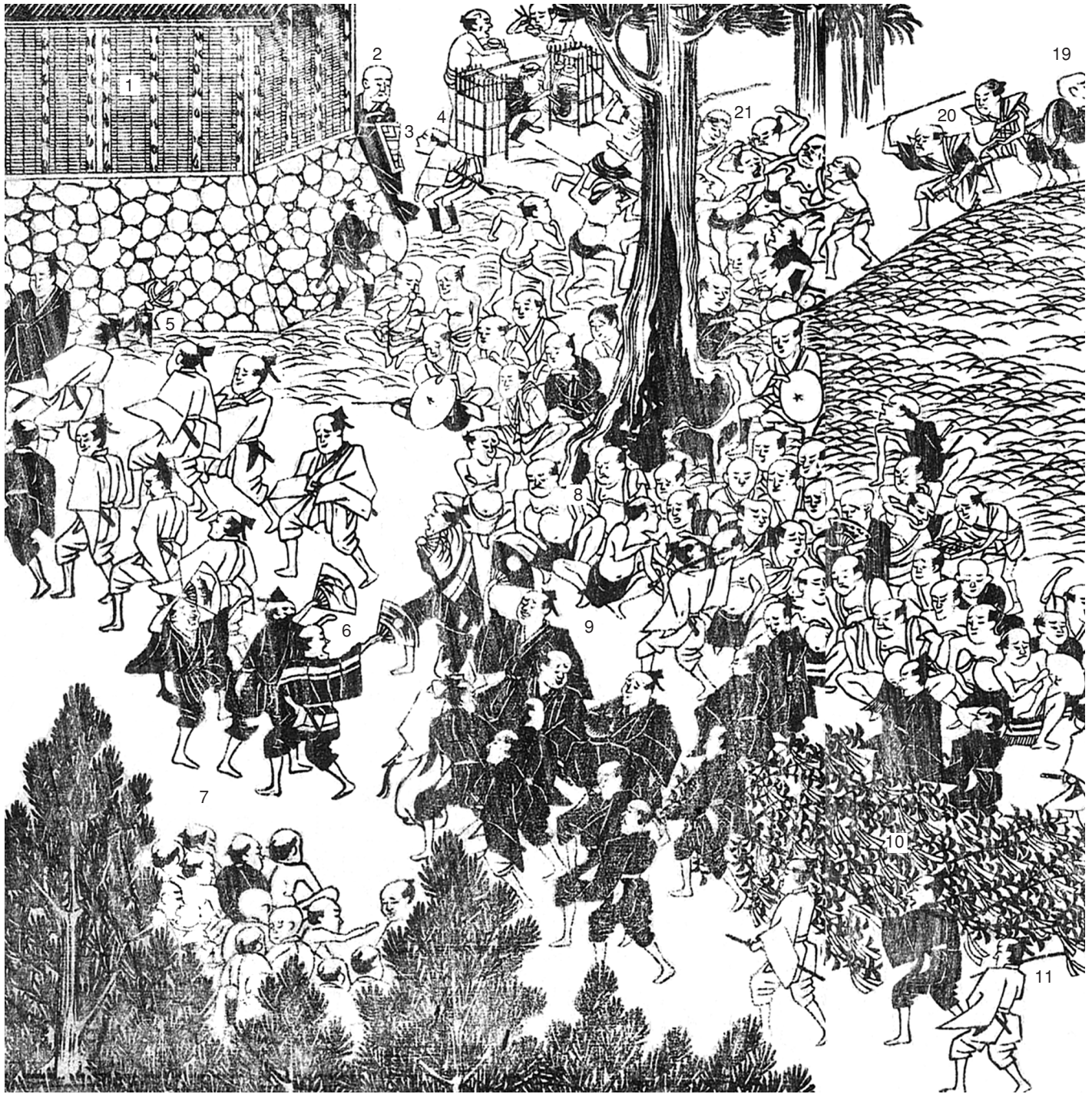


IV

行事と娯楽



29 坂本の山王祭



大津坂本（現滋賀県大津市）の日吉神社の祭りである山王祭は毎年4月中の申の日を中心に行われていた。中心は神輿の渡御であるが、その他にも多くの行事がある。その中で、大榎を中心として大勢の人々が行列を組んで御旅所との間を往復する時には、沿道を多くの人が埋め、大いに賑わったという。図の詞書では「山王祭ハ卯月中ノ申日にて、坂本法

師公人など古実を糺し、馬場通の行列莊観なり、ことごとく図する事能わず、ここにはわずか十か一をあらわすのみ」と記している。大榎、獅子、田楽、坂本の衆徒など、祭礼行列の重要な構成要素を描き、それらを見物する人々の大勢であることを示す。そして、行列の両側に警護にあたる者たちが人々を規制している様子も示している。

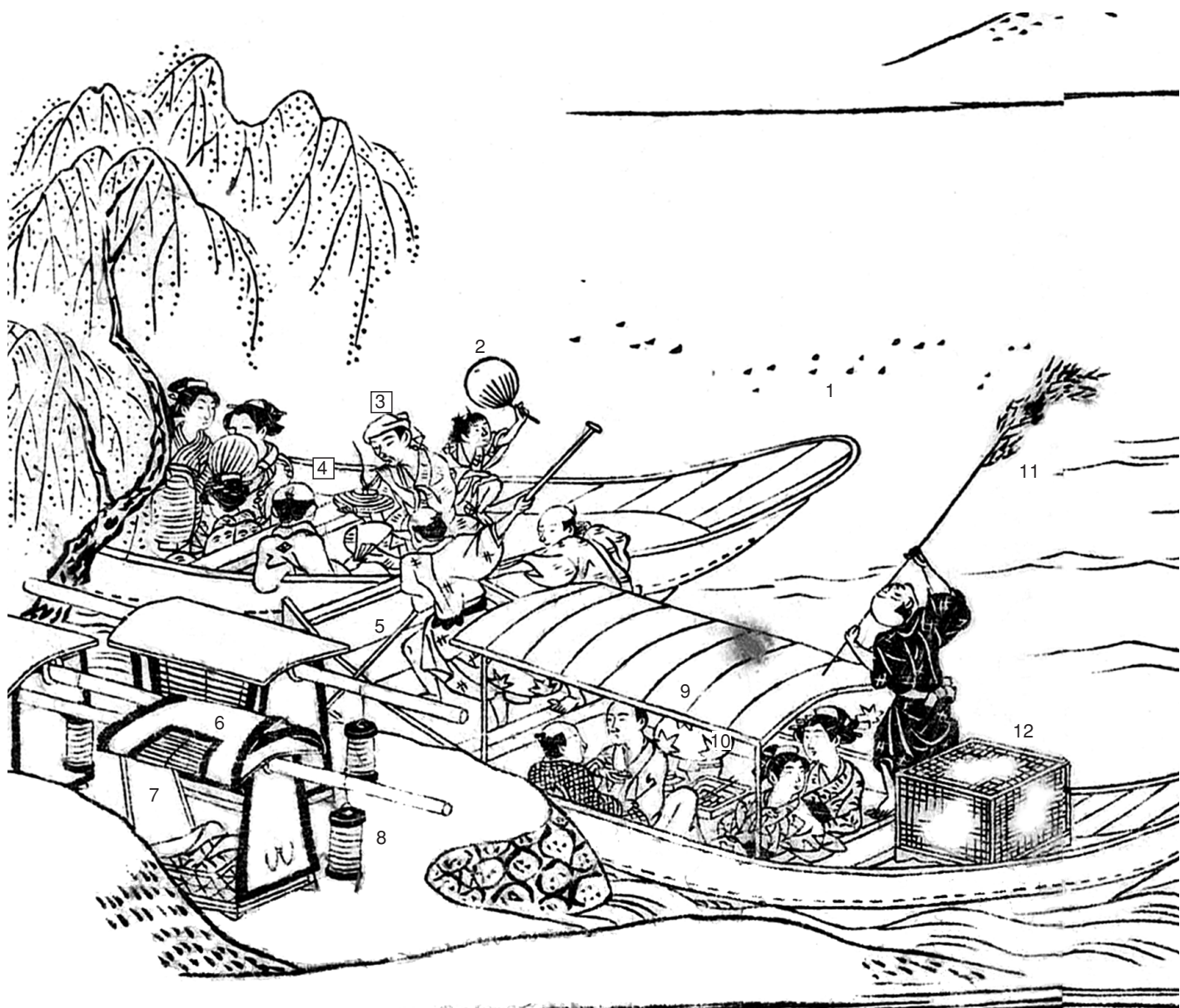
- 1 棧敷
- 2 僧侶
- 3 袈裟
- 4 屋台（守貞）
- 5 幸の鉢（近江名所図会）
- 6 扇子
- 7 裸足
- 8 上半身裸
- 9 越中禪（守貞）
- 10 大櫛（近江名所図会）
- 11 幣
- 12 獅子頭
- 13 獅子（近江名所図会）
- 14 警護
- 15 田楽（近江名所図会）
- 16 坂本の衆徒
- 17 子供を負ぶう
- 18 手を引く
- 19 座頭
- 20 袷
- 21 喧嘩
- 22 柄杓
- 23 杖
- 24 菅笠



絵は行列の本隊を描いているが、あわせて見物の人々や傍らを通行する人々も詳細に描いており、面白い。特に、絵の上部では盲目の座頭を手引きする女性が子供を背中に負ぶっている様子、また行列の末尾の所では、行列を見ることなく先を急ぐ、帯に柄杓を挟む抜け参り一行を示すと共に、その無礼を咎める警備の者が描き込まれている。本文では見物

人目当てに酒売り、飴売り、餅売りなど多くの店が出たと記しているが、ここではその代表として屋台が示されている。屋台の脇では2人の男が箸を使って食べている。(福田)

30 石山の蛍狩り



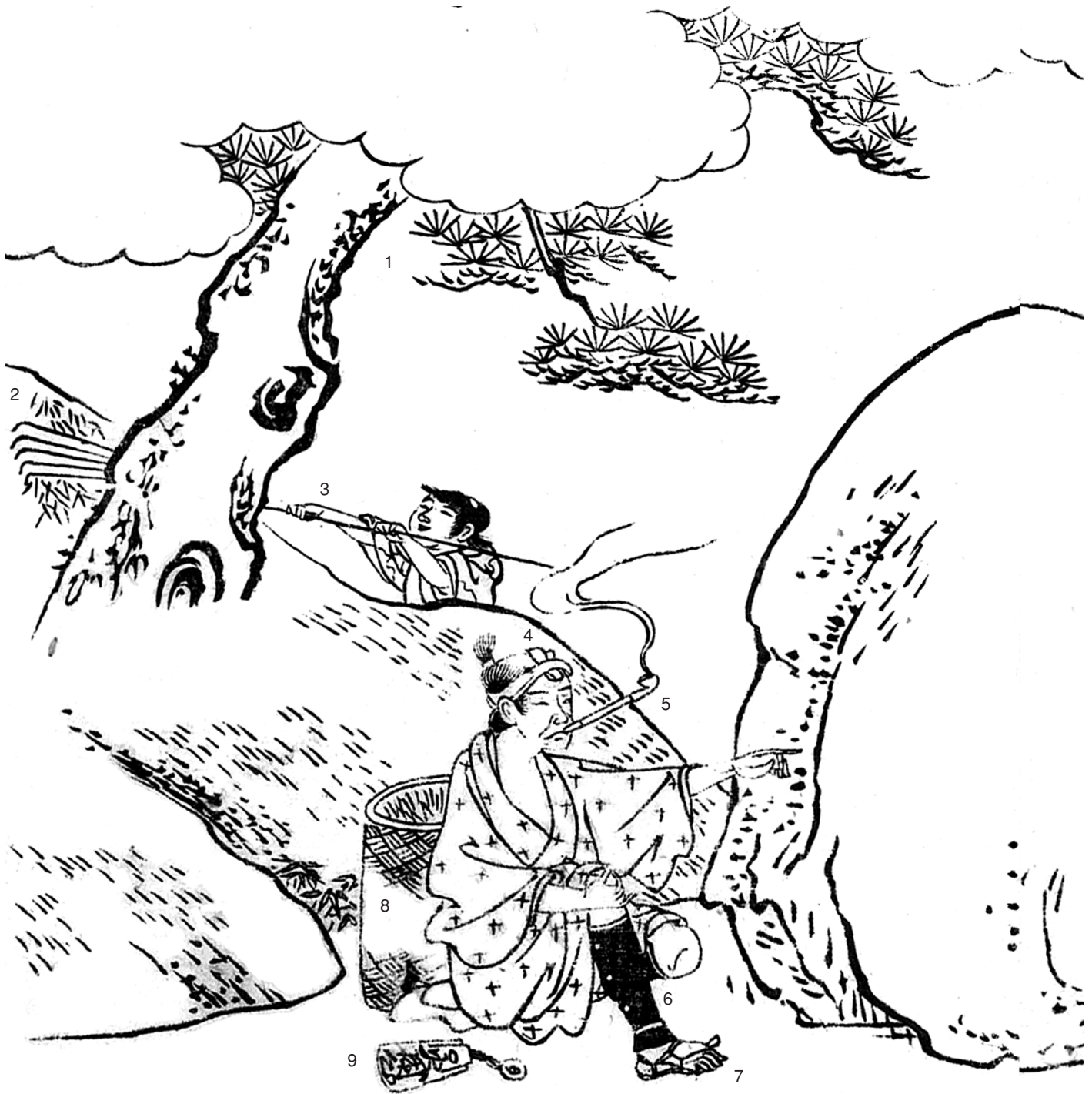
- | | |
|-----------------|-----------------|
| 1 蛍 | 14 篝火 |
| 2 団扇 | 15 延縄 |
| ③ 手拭いを被る | ①⑥ 延縄を引き上げる |
| ④ 提灯の火で煙草に火を点ける | 17 魚籠 |
| 5 櫂 | 18 出杭 (地方凡例録) |
| 6 幕 | 19 腹掛け |
| 7 駕籠 | 20 蛍籠 |
| 8 小田原提灯 | 21 笹竹 |
| 9 屋形 | 22 前垂れ (守貞) |
| 10 提灯 | ②③ 手拭いに入れた蛍をかざす |
| 11 笹 | 24 振り分け荷物 |
| 12 蛍入れ | 25 菅笠 |
| 13 触先 | |



かつての夏の風物詩であった蜚魚狩りの名所を描いている。旧暦では4月、5月の頃にあたる。現在の天津市石山の琵琶湖畔は有名で、京からも多くの人が出かけた。ここに描かれているのは、2艘の舟に分乗した蜚魚狩りの人々である。舟は1艘が屋根のついた屋根舟であり、1艘は屋根なしの舟である。この人々は駕籠に乗ってはるばると来たことが分かる。駕籠は客が蜚魚狩りを終えて帰るまでここで待つのであろう。船上の人々はそれぞれ座を占め、はや蜚魚を団扇で追い立てる子供もいる。手前の舟では、笹竹をかざして、蜚魚を捕ろうとしており、その脇には蜚魚を入れるための大きな籠が置かれている。この

笹竹をかざしている人物は客ではなく、舟を運航する店のものと思われる。右側には湖畔の往還が描かれ、手前には蜚魚狩りに出てきた近所の親子が描かれ、その向こうには二人の旅人がいる。たまたま通りがかって蜚魚に出合い、蜚魚を捕まえて、手拭いの中に入れて、それを眺めながら歩いている。そして、湖上に篝火を焚いて漁をする様子が描かれている。長い綱をはって漁をする延縄漁を示している。船上には大きな魚籠が置かれ、漁師は延縄を曳きあげて、食らいついた魚を捕ろうとしている。魚は琵琶湖で多く取れる鮒であろうか。(福田)

31 金勝山の震岩



- | | |
|--------|--------|
| 1 松 | 10 震岩 |
| 2 松葉 | 11 扇子 |
| 3 熊手 | 12 若衆 |
| 4 向う鉢巻 | 13 足袋 |
| 5 煙管 | 14 草履 |
| 6 脚絆 | 15 太刀 |
| 7 草鞋 | 16 脇差し |
| 8 籠 | 17 頬被り |
| 9 煙草入れ | |

こんぜやま
 金勝山を訪れた人々が巨石を驚いて見入っている様子を描くが、この岩は金勝山震岩と呼ばれ、詞書でも「金勝寺山の震巖は、数十人のちからをもて動かせども更に動かず、身を浄めて僅かに指先をもつて押せば忽ち震ぎ動くなり」とある。こんしょうじ金勝寺は現在の滋賀県栗東市荒張にある。岩の右側に4人の武士



がいるが、彼等は遠方からお供を伴ってわざわざここを訪れた者たちであろう。岩について評定している。その一人の若侍が手を伸ばして、指で岩を押そうとしているが、これは伝説を確認しようとしているのであろうか。岩の左側に、座り込んで、頭に向こう鉢巻をし、煙管で煙草をすっている者が、指さ

して武士たちに説明している。背後に大きな籠が置かれており、これで山から落葉や枯れ枝などを里へ運んでいることを示し、その途中で一休みしているところに、武士一行が訪れたのであろうか。背後には少年が熊手で松葉を掻き集めている。(福田)

32 津島祭

- 1 鉾持ち
- 2 布鉾
- 3 兄若い衆
- ④ 船
- 5 足場板
- 6 波幕
- 7 柱幕
- 8 紅白梅
- 9 若松
- 10 屋台幕
- 11 下段置物
- 12 上段置物
- 13 宝鐸
- 14 屋根
- 15 大山
- 16 提灯
- 17 袴
- 18 槍
- 19 長柄傘
- 20 陣幕
- 21 弓
- 22 矢筒



津島牛頭天王（現愛知県津島市の津島神社）の祭礼のようすを描く。6月14日の宵宮祭と翌15日の朝祭に、船に乗せられた山車が川を巡行する。ここで描かれているのは、15日の朝祭である。前日の宵祭で、津島5ヵ村の車樂が、それぞれ2艘の船を連結した上に乗せられ、笠鉾とよばれる飾り付けをし、360もの提灯を掲げる。これは「巻藁船」ともよばれる。翌日は、宵祭で巡行した車樂の骨組みに朝祭用の飾り付けを施し、津島南部にある市江村の車樂が朝祭にのみ参加して先導する。市江車には布鉾を

持った男たちが10人ほど並び、船が着岸しようとするときに川に飛び込み、岸に上がって牛頭天王社に参詣するのが習慣となっていた。本文には、一番に到着した者に褒美として1000文が与えられた、とある。絵にも右手のほうで、布鉾を手にした人が川に入っているようすが描かれている。このほか、明治5年（1872）までは、津島村から「大山」とよばれる巨大な山車5台も登場していた。この絵の中央部分に描かれているひとときわ大きな山車と、左に見える3台がそれであろう。



車楽の置物は猿楽の演目、山車の置物は故事や嘉例に基づく人形が選ばれたとされるが、津島車の当番車にあたった車は、高砂を飾りつけるのを常としたという。絵の右端に描かれた車がおそらく当番車で、高砂らしき人形が飾り付けられているようすをうかがうことができる。各車の飾りつけはさまざま、屋根の形も、妻入りと平入りとがあった。本文には、この祭礼を見物した伴蒿蹊の「津島祭の記」が引用されていて、宵祭から朝祭にかけての絢爛な山車の巡行と賑わいとが記されている。伴蒿蹊のよ

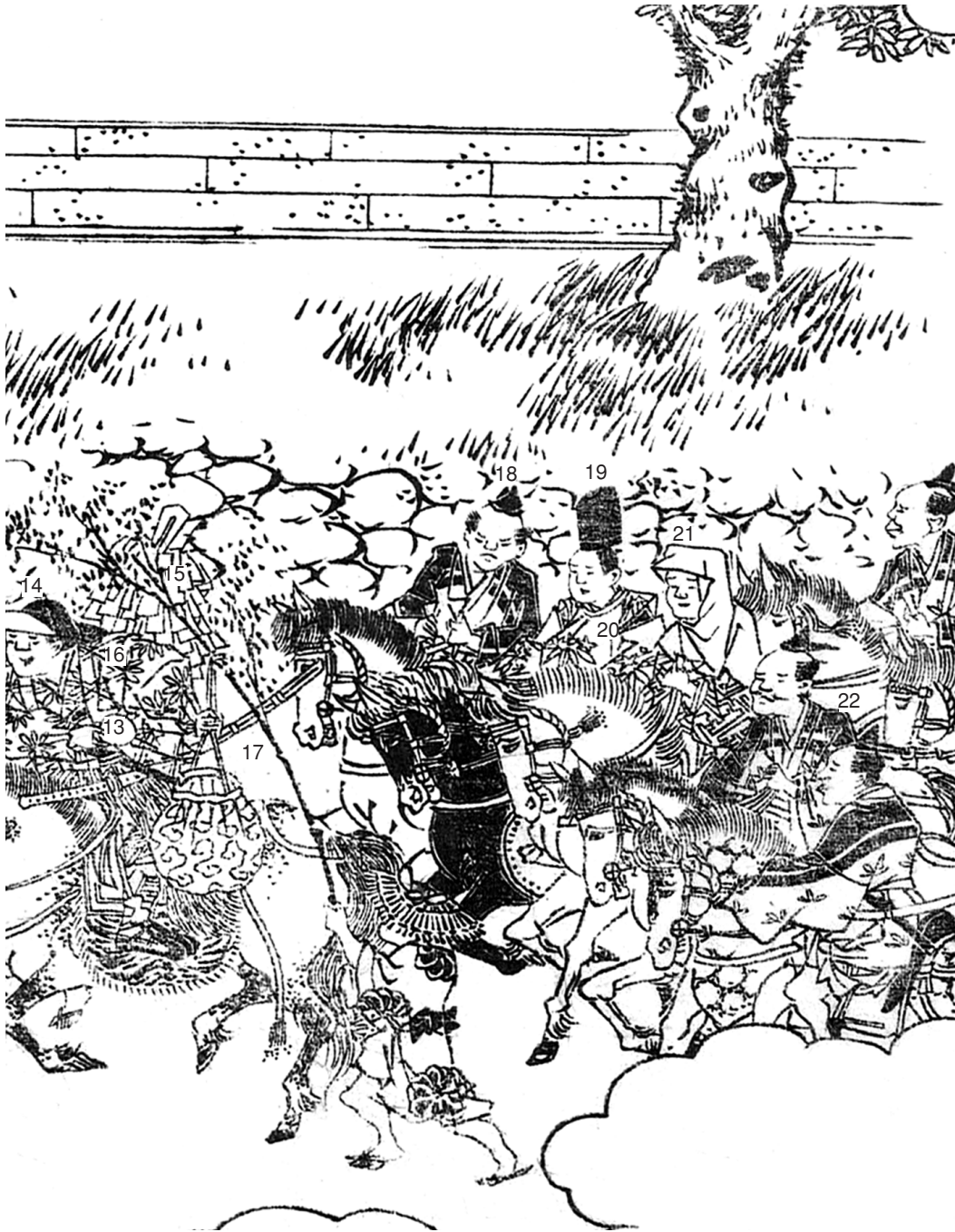
うに、祭り見物のためにわざわざ遠方から訪れたり、伊勢参宮の途中で立ち寄る旅人も多かったようだ。絵の中にも、左端の方に見物する群集が描かれているほか、茶店が出たり、陣幕に囲まれた弓場が作られている様子など、祭りならではの賑わいを感じられる。津島祭は、現在は「津島天王祭」（重要無形民俗文化財）とよばれ、7月第4土曜日の夜と翌朝にかけて行われる。なお、描かれた山車などの各部名称や祭礼の内容についての出典は、愛知県教育委員会編『津島祭』による。（山本）

33 吉田天王祭



三河国吉田（現愛知県豊橋市）の牛頭天王社で6月15日に行われた例祭のようすを描く。本文によれば、笹を手にする編笠姿の人々は「囃子方」で、「数十人同音に謳ふ」とあることから実際にはもっと大勢であったようだ。その右手には、大太鼓、小太鼓が、「塗笠被り覆面し、錦の陣羽織・小手脚当など着し、至つて古雅の体相なり」とある。画面右手の一団は、頼朝の出立を素材とした仮装の行列で、

立烏帽子姿の頼朝役は14～15歳の童子が務めた。頼朝の右に見える被り物の人物は「頼朝の母」、烏帽子に柿の素袍姿の侍は「十六人の殿原」、また行列の先頭で、背中に幣をさした馬上の人物は「畠山重忠」。この畠山重忠が左手に持っているのは饅頭で、これを領主邸近くに設けられた栈敷の前で投げる。饅頭は、重忠の脇にいる編笠姿の人が、袋に入ったものを笹に結わえて掲げている。この饅頭に当



- 1 囃子方
- 2 編笠
- 3 浴衣 (守貞)
- 4 笹
- 5 提灯
- 6 塗笠
- 7 陣羽織
- 8 覆面
- 9 大太鼓
- 10 小太鼓
- 11 撥
- 12 饅頭の入った袋
- 13 饅頭
- 14 騎射笠
- 15 幣
- 16 陣羽織
- 17 太刀
- 18 烏帽子
- 19 立烏帽子
- 20 直衣
- 21 綿帽子
- 22 柿の素袍
- 23 眉を剃った女性
- 24 前結び
- 25 扇子
- 26 中剃り (守貞)

たった人は吉であるという。

なお、文化年間初頭に地元の山本貞晨が著した『三河国吉田名蹤綜録』にも、吉田天王社の例祭が記されているが、先の「十六人の殿原」の代わりに「競馬十二騎」とあったり、饅頭を投げる一連の行事が「饅頭喰」と呼ばれるもので、範頼の愛臣であった笹瀬万十郎にちなんだものであるという説などを紹介している。同書によれば、笹踊りの「笹」も、

この笹瀬にちなんだものとしている。吉田の天王祭では、前日の6月14日夜に大掛かりな花火が打ち上げられ、国中のみならず、他国からも大勢見物に訪れたようだ。現在でも、7月14日・15日にこれらの一連の祭礼が続けられている。(山本)

34 三島大社のお田打ち

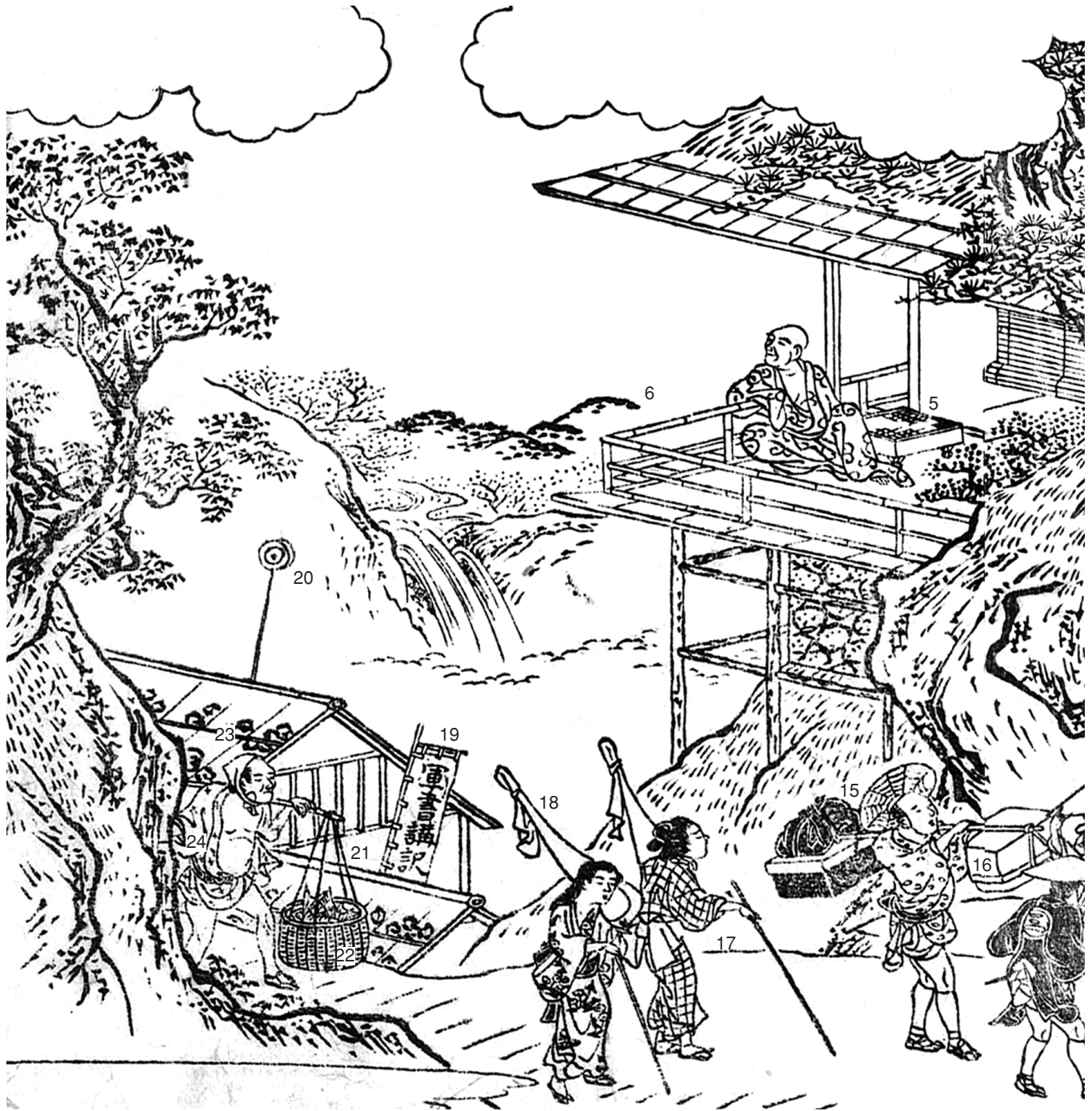


- 1 舅の穂長
- 2 折烏帽子
- 3 白い翁面
- 4 肩衣
- 5 大口袴
- 6 扇子
- 7 鋤
- 8 婿の福太郎
- 9 黒い翁面
- 10 鍬
- 11 傘
- 12 シャもじ
- 13 へら
- 14 飯櫃
- 15 頭上運搬

伊豆国一宮であった三島大社のお田打ちの一場面が描かれている。お田打ちは田祭り、田遊びとも呼ばれ現在も正月に行われている予祝行事で、苗代打ち、種蒔きなどから鳥追いまで稲作の一年の所作が模擬的に演じられ、最後に田の四方をまわり夕立にあって終わる。演目は白い翁面に肩衣、大口袴、折烏帽子をつけた舅の穂長と、同じ姿に黒い翁面をつけた婿の福太郎の対話と所作を中心にさまざまな役が登場して進行するが、中でも夕立にはシャもじ、箸、面、ササラなどを吊るした骨のみの傘をさした田主役が登場する。

本図はその登場人物からみてこの夕立の場面を描いたものと思われる。鍬を持つ福太郎、鋤を持つ穂長、傘をさした田主役に飯櫃をささげ持つ中指役は現行のものと同様であるが、現在男性が演じている田主役が女性である点が異なる。初代広重も「東海道五十三次三島祭の図」で田主役を女性として、しかも破れていない傘をもち、現在ではみられない町を練り歩いている姿を描いており、お田打ちが登場人物、衣装、持ち物などに変化をみせながらも今日まで継承されてきた姿がうかがえる（『三島市史』下、『静岡県史』資料編23 民俗1）。（中村）

35 箱根塔沢の温泉宿



- | | |
|-----------|--------------|
| 1 温泉に入る | 13 脚絆 |
| 2 手拭い | 14 杖 |
| 3 湯女 (守貞) | 15 菅笠 |
| 4 浴衣 (守貞) | 16 両掛け (用心) |
| 5 碁盤 | 17 瞽女 (膝栗毛) |
| 6 手摺り | 18 三味線袋 |
| 7 松 | 19 幟「軍書講訳」 |
| 8 片肌脱ぎ | 20 楊弓看板 |
| 9 手拭いを被る | 21 天秤棒 |
| 10 足袋 | 22 籠 |
| 11 草履 | 23 頬被り (膝栗毛) |
| 12 草鞋 | 24 尻からげ (嬉遊) |

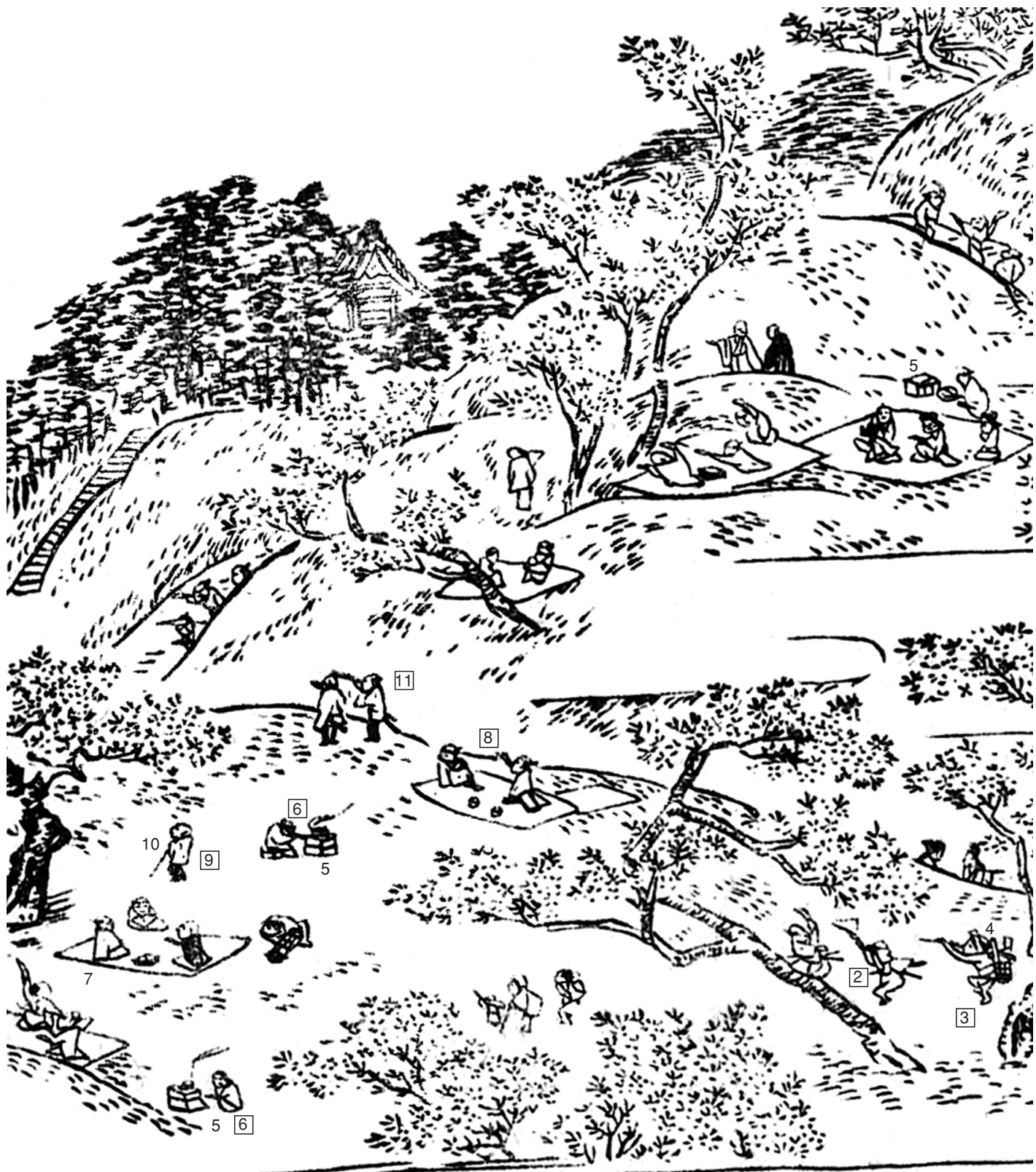
箱根に湧き出る湯本、塔沢、堂ヶ島、宮之下、底倉、木賀、芦之湯の温泉を箱根七湯と呼んだが、その内の塔沢の温泉宿を描く。江戸中頃から箱根七湯の名は諸国に知れ、江戸をはじめ関東各地から湯治客がやってきていた様は、刊行された案内書や訪れた文人・俳人による紀行文、滞在記からうかがうことができるが、本図には湯治客がゆったりと温泉に



つかり、湯上がりにくつろぐ姿が描かれている。湯屋の隣では浴衣を用意して湯上がりの客を待つ湯女の姿があり、涼むための張り出しには碁盤の用意も見える。詞書に「塔沢は殊に山水の美景なり。内湯とて温泉を寛にとりて滝湯にし、……その間々は糸竹の音、楊弓、軍書読の席にて興を催すも、みな養生の一つなるべし」とあるように、宿の前には湯治

客を目当てにした「軍書講読」の幟や楊弓の的をかたどった看板が立つ。三味線を抱えた瞽女2人は三味線のみで他に荷のないところをみると、旅の途中というより「糸竹の音」を奏でに宿に呼ばれたのか、あるいは自ら訪ねていくのであろう。(中村)

36 品川御殿山の花見





- | | |
|------------|----------|
| 1 桜 | 7 敷物 |
| 2 扇子を持って踊る | 8 野点をする |
| 3 角樽を運ぶ | 9 桜を観る |
| 4 両肌脱ぎ | 10 杖 |
| 5 コンロ | 11 海を眺める |
| 6 外で煮炊きする | |



桜の花見で賑わう御殿山（現東京都品川区）の様子を遠景から描いているが、人々の身分・性別や行為の概要はかろうじて読み取ることができる。現在のソメイヨシノ全盛の時代と異なり、18世紀末の江戸では、オオシマザクラとその改良種の八重桜、西日本の気候に適したヤマザクラなど、桜の種類は多様であったと考えられている。人々は思い思いの場所に陣取り、花見を楽しんでいる。なかには簡易コンロを使う人も描かれ、野外で煮炊きし、温かい食事を楽しむ者がいたことがわかる。

御殿山の桜は、江戸の気候に適し潮風にも強いオオシマザクラであったと推定されている。オオシマザクラは濃い緑色の葉の間に大きな白い花をつける。葉の香りは強く、桜餅にも使われる。行楽地としてにぎわった御殿山であったが、19世紀後半に対外的危機が強まるなかで、江戸湾の台場建設用の土を採るために切り崩され、失われてしまった。

（富澤）